東洋文字文化研究――白川静博士とわたしの印学（上）――

久米雅雄

（目次）

一．はじめに
二．漢字の起源―甲骨文・金石文研究略史を振り返る―
《中国における甲骨文・金石文研究略史》
《日本における甲骨文・金石文研究略史》
三．わたしの印学―「金印奴国説への反論」（一九八三）から「日本の花押と戦国大名の印章」（二〇一八）までの書誌
以上、（上）
四．白川静博士との出遭いとわたしの印学研究―書簡・葉書・講座を通して―
五．印学研究の個別的成果とその方法論―国宝金印・新邪馬台国論・邸閣考―
《国宝金印「漢委奴国王」印の読み方と志賀島発見の謎》
《新邪馬台国論（筑紫女王国・畿内邪馬台国「二王朝並立論」と「親魏倭王」金印・「魏率善倭中郎将」「魏率善倭校尉」銀印）》
《「魏志倭人伝」の「邸閣」と倭国の官制》
六．福岡県糸島市三雲遺跡出土刻書土器の文字学的検討と「白川文字学の検証」
七．まとめにかえて

一．はじめに

二〇一九年六月二二日（土曜日）一四時から一六時三〇分の間、「第一三回『立命館白川静記念東洋文字文化賞』」の表彰式と記念講演会が開催された。会場は立命館大学衣笠キャンパス内の平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルームで開かれた。元立命館大学文学部教授である真下厚氏による記念講演「白川学と『万葉集』」のあと、今回の受賞者は教育普及賞に京都大学人文科学研究所所長である岡村秀典氏（対象業績：鏡が語る古代史ほか）、そして奨励賞に台湾の佛光大学助理教授である黄庭頎氏（対象業績：従述祖至楊己―両周「器主曰」開篇銘文研究ほか）が表彰され、杉橋隆夫所長、芳村弘道副所長、白川先生のご息女である津田史氏らをまじえての記念撮影となった。その後、関係者との懇親のひとときも有意義なものであった。そのおり研究所から第

四回の受賞者であるわたくし（業績対象:印章研究）に第一三回の『紀要』へ、学生時代から積み上げてきた「印学」の立場から執筆をしてみたらとの打診があったので、このたびの寄稿となった次第である。

簡単に自己紹介をしておくと、わたくしは愛媛県松山市の出身であり、一九六六年に立命館大学文学部史学科（日本史学専攻）に入学、考古学と古代史を北山茂夫門下として学び、一九七〇年の卒業の後は大阪府教育委員会文化財保護課に入庁し、考古学的な発掘と国宝重要文化財、府指定有形文化財などを扱う美術工芸の担当として永く勤め、行政職に身を置きながら、二〇〇一年に立命館大学より学位論文「日本印章史の研究」に対して博士号〔文学〕を授与された者である。二〇〇八年に府庁を定年退職後、大阪芸術大学客員教授となり、日本美術史・東洋美術史・工芸特論（日本で唯一の印章学を担当）・博物館学等を講じたものである。

白川静先生の直接の門下ではないものの、わたくし自身、東洋文字学に深い関心を寄せ、さいわい一九八三年の拙稿「金印奴国説への反論」発表以降、二〇〇六年一〇月に先生がお亡くなりになるまで、直接・間接に封書・お葉書・ご講演等でご縁を頂戴して参った経緯もあり、二〇一〇年には第四回の白川静賞（教育普及賞）をいただいたこともあって、今般「東洋文字学研究―白川静博士とわたしの印学」というテーマで書かせていただくことにした。

甲骨文の発見は公式には一八九九年ということになっており、今年でちょうど一二〇年の節目にもあたる。甲骨・金石文研究には目覚ましいものがあるがまずは順序として「漢字の起源―甲骨文・金石文研究略史―」から振り返っておきたく思う。

二、漢字の起源
―甲骨文・金石文研究略史を振り返る―

一般的に「甲骨文」とは「亀甲・獣骨などに刻まれたシナ古代の象形文字。占卜の記録を刻したもの。中国河南省殷墟から多数発見」、「漢字の前身で、殷墟から発見されるので殷墟文字、またその大半は卜占に関することが書かれてあるため卜辞ともいわれる。殷代の歴史を明らかにする上で重要な資料となっている」と説明され、「金石文」については「中国で、鐘や鼎の金属器および碑・碣・瓦・甎など石類の上に刻んだ文字。殷～周代の青銅器・玉器・陶器などの上に刻まれた文字を含む」と解説されている。

金石文の研究については拙著『日本印章史の研究』（二〇〇四）の第一章「中国古印の考古学―方寸の世界に歴史をよむ―」の中でも論じたように「中国では北宋の時代、とりわけ仁宗皇帝（一〇二二―一〇六三）の時代あたりから『金石学』が盛んとなりはじめ、古代の銅器を蒐集し、それを実証的に研究しようとする傾向が強くなってくる」。その具体的な類例として、欧陽脩（一〇〇七―一〇七二）の『集古録跋尾』、劉敞（一〇一九―一〇八八）の『先秦古器図』など、そして神宗皇帝（一〇六七―一〇八五）時代の沈括（一〇三一―一〇九五）の『夢渓筆談』などを挙げることができる。その流れは元・明代に衰退をみせるものの、清代に入って顧炎武（一六一三―一六八二）らによって「清朝考証学」が開かれていくことによって、

彼の『金石文字記』、銭大昕（一七二八－一八〇四）の『潜研堂金石跋尾』、馮雲鵬・馮雲鵷らによる『金石索』（一八二一：図1）、呉式芬（一七九六－一八五六）の『攈古録金文』（一八九五：図2）、『封泥攷略』（一九〇四）などへとさらなる発展をみせるのである。この項では特に一八九九年の、すなわち「甲骨文発見」以来の古文字研究史に焦点を絞って論じていくことにする。

《中国における甲骨文・金石文研究略史》

一）呉大澂（一八三五－一九〇二）は清末の金石学者であり書画家である。江蘇省呉県の出身であり、一八六八年に進士となり、翰林院編修、太僕寺卿、左副都御史などを歴任、一八八五年にはロシアとの国境問題を処理、一八八六年に広東巡撫、一八九二年に湖南巡撫、一八九四年の日清戦争の折には湘軍を率いたことなどで知られる。著書に『字説』（一九七一）、『鐘鼎籀篆大観』（一九八七）、『古玉図攷』（一九九七）などがある。

二）王懿栄（一八四五－一九〇〇）は清末の金石学者で中国の山東省出身である。一八八〇年に進士となり、一八九五年に国子監祭酒に任命された。伝承では一八九九年に薬店で購入した竜骨に文字が書かれてあるのを発見、劉鶚とともに研究をすすめ、殷代の亀甲獣骨文字であることを判定した功績で有名である。一九〇〇年の「義和団の乱」の際に自殺したが、著述に『福山金石志』『天壌閣雑記』『求闕文斎文存』『漢石存目』（『王文敏公遺集』所収）がある。

三）孫詒讓（一八四八－一九〇八）は清末の学者・教育者であり、中

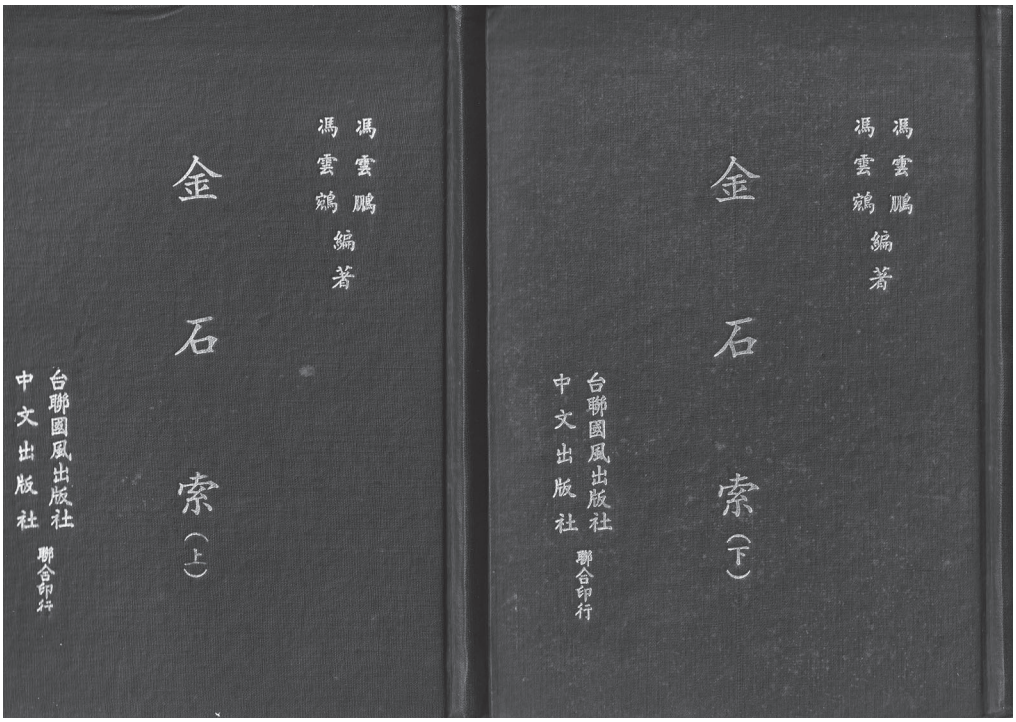

図1（1821；1974）

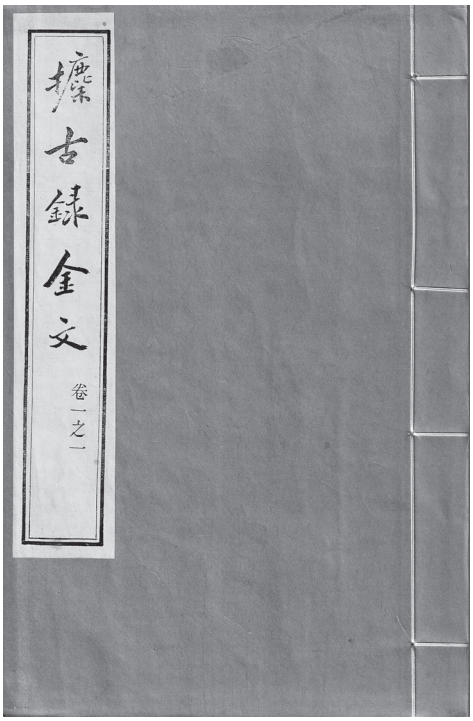

図2（1895）

国の浙江省温州瑞安の出身である。「国民の智愚賢否は国家の強弱盛衰と関連している」との立場から「初等小学校を各地に設置し、村から不学の家をなくし、家から不学の童をなくす」ことに尽力した。『周礼正義』『墨子間詁』のほか、亀甲獣骨文字を研究して『名原』（一九〇五）、『契文挙例』（一九一七）、ほかに『古籀拾遺』、『古籀余論』などの著作がある。

四）劉鶚（一八五七－一九〇九）は清末の作家・考古学者兼実業家であり、江蘇省六合県の出身である。字を鉄雲と言い、博学多才で、「洋為中用」の立場で西洋の学問を積極的に取り入れた。医学・数学・文学・治水学・金石学にも通じ、実業家としての力量も評価の高いものであった。作品で有名なものに譴責小説ともいわれる『老残遊記』があり、金石学では甲骨文字研究の基礎とも言える『鉄雲蔵亀』（一九〇三：図3）、そのほか『鉄雲蔵陶』（一九〇四）、『鉄雲泥封』（一九七一）、『鉄雲蔵貨』（一九八六）などがある。

五）羅振玉（一八六六－一九四〇）は清末民初から満州国にかけて活躍した考証学者（考古学者兼教育者）であり、教育制度の改善や西洋知識の導入に努めた。浙江省紹興府上虞県の出身であり、一八九六年に上海に東文学社を設立して日本研究をすすめるとともに、北京農科大学の監督もつとめた。亀甲獣骨文字の発見以降は、先の劉鶚らと研究をすすめて『殷商貞卜文字考』（一九一〇：図4）を、一九一一年の辛亥革命後は日本に亡命して、京都で内藤湖南をはじめとする日本人学者らと交流をもち、東洋学研究に大きな刺激を与えた。一九一一年、人を介して甲骨の出土地が殷墟であることをつきとめ、『殷墟書契』

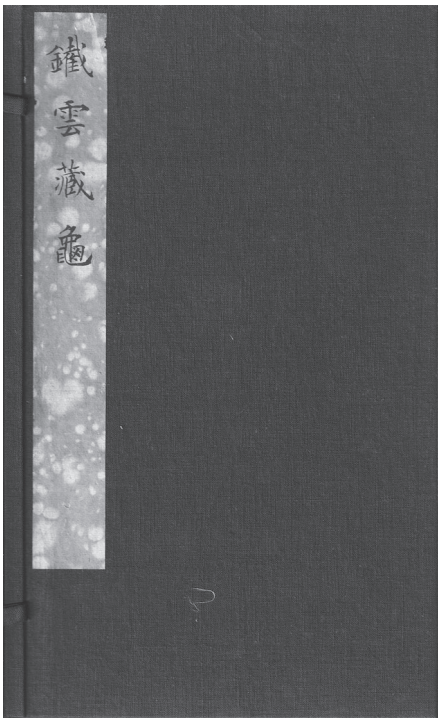

図3（1903）

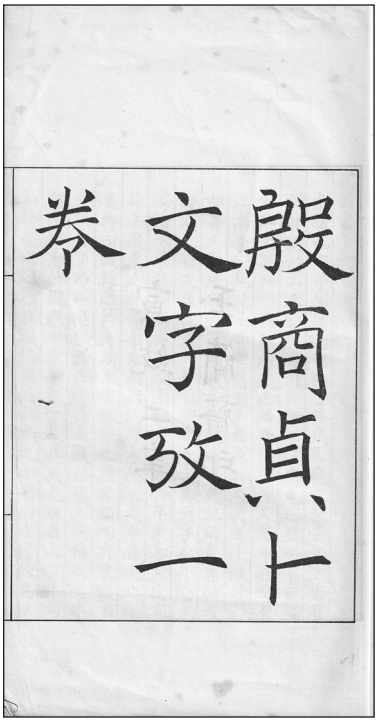

図4（1910）

（一九一三）、『殷墟書契考釈』（一九一四）、『殷墟書契菁華』（一九一四）、『鉄雲蔵亀之餘』（一九一五）と書きすすめ、玉器・銅器・骨角器・石器などを蒐集し、『殷墟古器物図録』（一九一六）、『殷文存』（一九一七）、『集殷虚文字楹帖』（一九二一）など、研究を深めた。王国維、郭沫若、董作賓とともに「甲骨四堂」と呼ばれた。併行して『斉魯封泥集存』（一九一三）、『赫連泉館古印存』（一九一五）、『隋唐以来官印集存』（一九一六）など、印章研究に着手していたことも忘れてはならず、子息の羅福頤も『古璽文字徵附漢印文字徵』（一九三〇）などの著作で印章研究に一石を投じた。一九〇九年以降のスウェーデンのヘディン、ハンガリーからイギリスへ帰化したスタイン、フランスのペリオなどによるシルクロード探検（敦煌や楼蘭など）にも深い関心をもち、王国維と共にスタインの『流沙訪古記』（一九〇九）、『流沙墜簡』（一九一四）の翻訳刊行などにも努めた。帰国後は、愛新覚羅溥儀の家庭教師をも務め、満州国が成立した一九三二年には参議府参議や監察院長を務めた。「敦煌古写本」「殷墟甲骨文字」「紫禁城檔案」など、貴重な文化財の保全に大きな貢献を果たし、金石文の大著として『三代吉金文存』二〇巻（一九三六）を遺した偉業も忘れてはならない。

六）王国維（一八七七－一九二七）は清末民初の学者であり、その研究領域も史学・哲学・文学・考古学・美学と幅広く、「新学術」の開拓者とされる。浙江省杭州府海寧州の出身で、字は静安、号は観堂である。羅振玉の東文学社で学び、一九〇一年に日本の東京物理学校に留学、病のため帰国し、一九〇三年からは国内で講じていた。一九一一年に辛亥革命がおこると日本に亡命し、帰国後、清華研究院教授となったが、清朝の悲運を嘆いて入水自殺した。羅振玉から「清朝考証学」を学び、西洋学術の方法論も修得して、甲骨文字の解読や殷周史の解明に大きな役割を果たした。著作には『国朝金文著録表』（一九一四：図5）、『流沙墜簡』（一九一四）、『殷墟卜辞中所見地名考』（一九一五）、『殷周制度論』（一九一七）、『戩寿堂所蔵殷墟文字文存』（一九一七）、『観堂集林』（一九二三）、『海寧王静安先生遺書』（一九四〇；一九七六）などがある。「甲骨四堂」の重要人物のひとりである。

七）郭沫若（一八九二－一九七八）は中華民国、中華人民共和国の文学者・歴史家・政治家で、四川省楽山県の出身である。一九一四年に日本に留学、第一高等学校予科で日本語を学び、六高（岡山大学）を経て、九州帝国大学医学部を卒業している。帰国後、新文学運動に参加するが、中国国民党の蔣介石と対立して中国共産党に入り、

一九二八年に蔣介石の手を逃れて日本へ亡命、中国古代史の研究に従事した。一九三七年に日中戦争が始まると、帰国して抗日統一戦線に参加、一九四九年に中華人民共和国が成立すると、国務院副総裁・文化教育委員会主席・科学院院長を兼任した。一九六六年の文化大革命のおりには自己批判をおこない、文化大革命を支持し、毛沢東の庇護を受けた。文学としては詩集『女神』、戯曲『屈原』などがあり、甲骨学・金文学においては『甲骨文字研究』（一九三一）、『両周金文辞大系』（一九三二）、『卜辞通纂』（一九三三）、『古代銘刻彙考、続編』（一九三四）、『青銅器研究要纂』（一九三五：図6）、『殷契粹纂』（一九三七）、『商周古文字類纂』（一九四四）、『中国古代社会研究』（一九四七）などがある。彼も「甲骨四堂」のひとりである

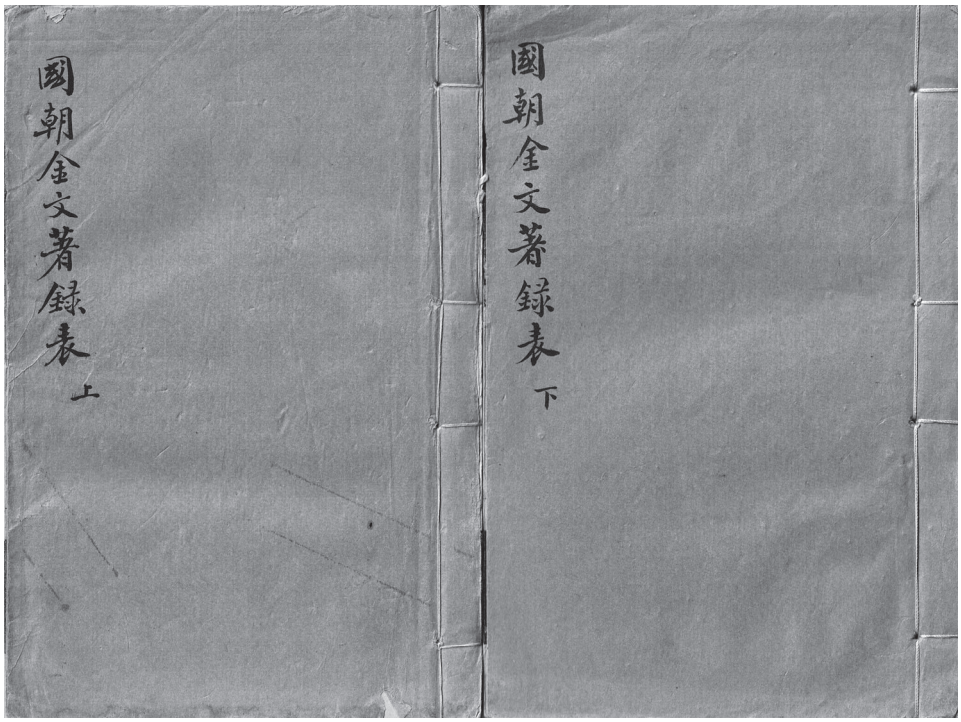

図5（1914）

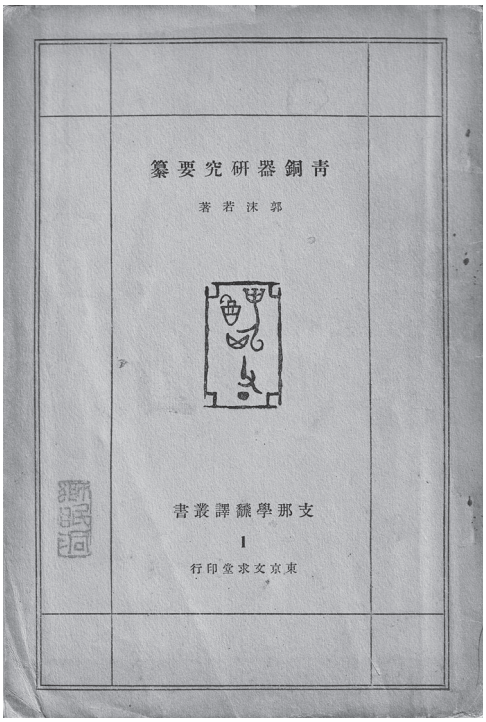

図6（1935）

八）董作賓（一八九五－一九六三）は中華民国の甲骨学者であり、羅振玉（雪堂）、王国維（観堂）、郭沫若（鼎堂）に連なる「甲骨四堂」のひとりである。董作賓自身は平廬と号している。河南省南陽府の出身であり、北京大学卒業後、中央研究院歴史言語研究所の研究員となり、一九二八年から一九三七年まで殷墟の発掘を行ない、のち台湾に渡り、一九四八年に台湾大学教授となった。甲骨文字をその様式により五期に区分（第一期：武丁時代、第二期：祖庚・祖甲時代、第三期：廩辛・康丁時代、第四期：武乙・文丁時代、第五期：帝乙・帝辛時代）し、当初、絵画的な性質をもった「馬」や「鹿」のまちまちの形をもった甲骨文が、次第に一定の字画文字に変遷していくプロセス（雄偉・勤直・頽靡・頸峭・厳整）を明らかにした点や、刻線の中に朱や墨で書かれた筆跡が認められることから、殷代における筆の使用を明らかにしたことなどで高く評価されている。甲骨学の大成者と言われるにふさわしく『新獲卜辞写本』（一九二八）、『商代卜亀之推測』（一九二九）、『民国十七年試掘安陽小屯報告書』（一九二九）、『甲骨文断代研究例』（一九三二：図7）、『甲骨年表』（一九三七）、『殷暦譜』（一九四五）、『小屯・殷墟文字甲編』（一九四八）、『小屯・殷墟文字乙編』（一九四九）、『中国古暦與世界古暦』（一九五〇）、『五十年来考訂殷代世系的検討』（一九五二）、『甲骨学五十年』（一九五五）、『殷墟文字外編』（一九五六）などを著わした。

九）于省吾（一八九六－一九八四）は中国古文字学者であり、遼寧省海城県の出身である。一九一九年に奉天高等師範学校を卒業したあと、奉天省教育庁科員となり、一九二八年に奉天萃升書院院監となり、一九三一年以後、輔仁大学講師、教授、北京大学教授を経て、燕京大学名誉教授となった。一九五二年に故宮博物院専門委員となり、中国訓詁学会顧問などを務めて、一九五五年に東北人民大学（吉林大学）の歴史系教授となり、古文字研究室主任兼学術委員会委員などの任に就いたが、一九八四年に亡くなった。主な編著書に『甲骨文字釈林』（一九七九：図8）、『商周金文録遺』（一九九三）などがある。

一〇）陳夢家（一九一一－一九六六）は中国の考古学者であり、南京の出身である。一九三二年に国立第四中山大学（南京大学）を卒業したあと、燕京大学に進み、一九三四年から三六年まで容庚教授（一八九四－一九八三：一九二五年に『金文編』、一九三三年に「殷墟

図7（1932）

図8（1979）

卜辞」を著わす。『金文編』は一九八五年に馬国権・張振林により増補されている。図9）のもとで古文字学を専攻、一九四四年から四七年までシカゴ大学に留学した。帰国後、清華大学中国文学科で甲骨学や西周の青銅器、木簡・竹簡の研究に邁進し、中国を代表する古文字学者、考古学者として高く評価された。初期の論文には「古文字中之商周祭祀」（『燕京学報第一九期』一九三六）、「商代的神話與巫術」（『燕京学報第二〇期』一九三六）などがある。一九五一年以降、政治的判断により冷遇されたが、そのような状況下でも資料調査や著述をすすめ、一九五七年には「慎重一点〝改革〟漢字」「関於漢字的前途」などの論文を発表、一九五九年に甘粛省武威市漢墓から「武威漢簡」が発見されたのをうけて、一九六〇年に甘粛省に出向いて出土資料の整理を行ない多数の論文を発表、その功績が認められて社会科学院考古学研究所に復職している。その後、一九六六年に勃発した文化大革命の最中に縊首自殺をしているが、享年五五歳であった。一九七九年に社会科学院考古学研究所は陳夢家のために哀惜の念をこめて追悼会を実施している。著作に『解放後甲骨的新資料和整理研究』（一九五四）、「殷代銅器」（『考古』第七冊　一九五四）、『殷墟卜辞綜述』（一九五六）、『漢簡綴述』（一九八〇）、『西周年代考　六国紀年』（二〇〇五：図10）がある。『年代考』附表のなかで「夏」の年代を紀元前二一〇〇～前一六〇〇年の約五〇〇年としている部分があるが、「聖書年代学」の「バベルの塔」に関する年代観とも整合していて、興味と関心をひくものがある。

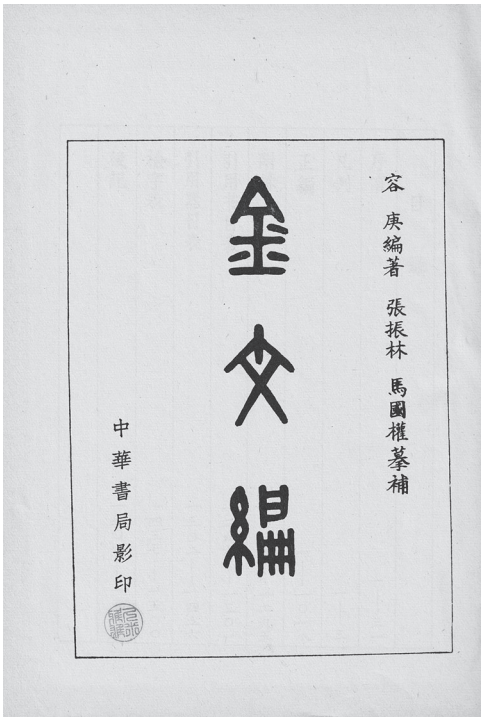

図9（1985）

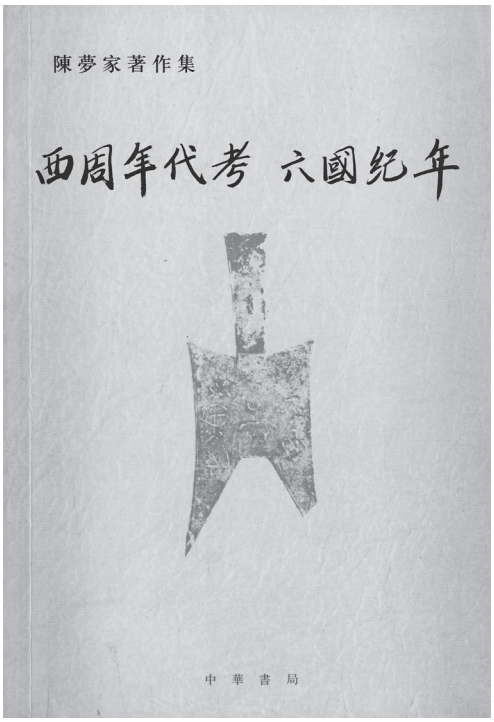

図10（2005）

中国でのこの期間、日本における研究略史はどうであったのか、次にその並行関係を辿ってみることにする。

《日本における甲骨文・金石文研究略史》

一）林泰輔（一八五四－一九二二）は日本における漢学者（千葉県出身）であり、日本甲骨学の先駆者ともいうべき人物である。東京高等師範学校教授でもあったが、先にもふれたように一九〇三（明治三六）年に中国で甲骨文字の拓本集である劉鶚の『鉄雲蔵亀』が出版されると非常な興味を覚え、未知の文字解読に挑むことになる。甲骨文字資料が日本へ初めて流入したのは一九〇九（明治四二）年のこととされており、東京の文求堂書店が甲骨一〇〇余片を入手し、林や後述の内藤湖南らの学者に分売したことを嚆矢とする。林はすぐさま研究に着手し同年の『史学雑誌』第二〇巻八、九、一〇号に「清国河南省湯陰県（正しくは安陽県）発見の亀甲獣骨について」と題する論文を掲載し「亀甲獣骨は殷代王室に属せりし卜人の掌りし遺物なるべし」とその本質を論破した。当時、『鉄雲蔵亀』（一九〇三）の劉鶚や『名原』（一九〇五）の孫詒譲がまだ定見をもっていなかった時代に開陳された林の指摘には大なる学史的意義がある。そしてこの林の論文は一九一〇年に羅振玉にも郵送され、大きな示唆を与えた。羅振玉は自身の所蔵している甲骨文字を改めて検討し、甲骨文中に殷の帝王の名前を一〇余発見するとともに、甲骨の出土地が殷墟であることを明らかにし、一九一〇年に『殷商貞卜文字考』一巻を著わすことになる。一方、林自身もその後の諸家所蔵の甲骨片を集成して「殷墟の遺物研究に就て」（『東亜之光』第一四巻五～八号　一九一九）、「亀甲獣骨文に見えたる地名」（『支那上代之研究』一九一九）、『亀甲獣骨文字』（一九二二：図11）などを著わし、実物資料に基づく甲骨学研究の方向性を指し示した点で大きな足跡を遺した。

二）白鳥庫吉（一八六五－一九四二）は日本の歴史学者（東洋史）であり（千葉県出身）、学習院教授（一八八六－一九二一）を経たあと、東京帝国大学教授（一九〇四－一九二五）となった。アジア史全体に精通し、日本上代史を初め、朝鮮史、塞外民族史、西域史研究などにおいて大きな業績を遺した。一九一〇（明治四三）年に「倭女王卑弥呼考」（『東亜之光』第五巻第六号）を著わし「邪馬台国九州説」を主張、京都帝国大学の内藤湖南が「卑弥呼考」（『芸文』第一巻第三号）

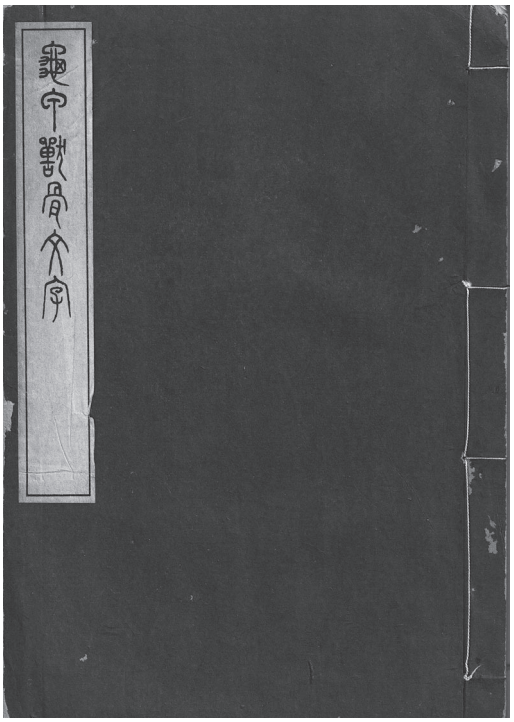

図11（1921）

を著わし「邪馬台国畿内説」を主張するという「邪馬台国論争」でも著名となった。東宮時代の昭和天皇の教育（一九一四－一九二〇）にも携わり、一九二四（大正一三）年に設立の東洋文庫理事長なども務めた。「烏孫についての考」（一九〇〇）、「西域史上の新研究」（一九一一）、「大宛国考」（一九一六）、「塞民族考」（一九一七－一九一九）、「粟特国考」（一九二四）、「條支国考」（一九二六）、「仏教東漸の伝説」（一九三五）など、優れた数多くの論文（『西域史研究』上下　一九八一に所収）を遺した。甲骨文・金文の研究に専門的に入っていくということはなかったが、日本を代表する東洋史・文献学派の中枢であり、ちょうど甲骨文の発見と研究の時期とも重なる人物であるので特記した。

三）内藤湖南（一八六六－一九三四）は日本の東洋史学者であり（秋田県出身）、秋田師範学校を卒業（この間、キリスト教会に通い、アメリカ人のガルスト・スミスについて『万国史』などを学んでいる）したあと、一八八七（明治二〇）年に上京し、ジャーナリストの世界に入った。仏教雑誌「明教新誌」の記者を経て、「日本人」「大阪朝日新聞」「台湾日報」「万朝報」などの編集に携わり、日露戦争においては開戦論を展開したとされる。一九〇七（明治四〇）年に京都帝国大学に招かれ（東洋史学講座講師）、一九〇九（明治四二）年に教授となり、一九一一（明治四四）年の辛亥革命による中国の考証学者羅振玉らの日本亡命と京都での学際により、亀甲獣骨文字資料、中国青銅器、古鏡、古璽印資料など、実物資料による東洋史研究は大いに加速することとなった。一九二六（大正一五）年の六〇歳定年まで京都帝国大学で東洋史を担当し、狩野直喜（一八六八－一九四七）・桑原隲蔵（一八七一－一九三一）・羽田亨（一八八二－一九五五）などと共に「京都支那学」を形成した。この間、政治家犬養毅（木堂：一八五五－一九三二）らとも深い交遊をもった（『月刊雑誌木堂』一九二一参照）が、退官後も読書や著述の日々を過ごし、彼の主な著作は『内藤湖南全集』（一九六九）におさめられている。一九三六（昭和一一）年に発行された『東洋文化史研究』（図12）には一九一七（大正六）年に大阪朝日新聞社主催の講演として話された「支那上古の社会状態」が収められており、この中で「口」への言及があり祭の「口」の形は肉を供へることを表し」祝の口は「神様の前に跪いて口でモグ

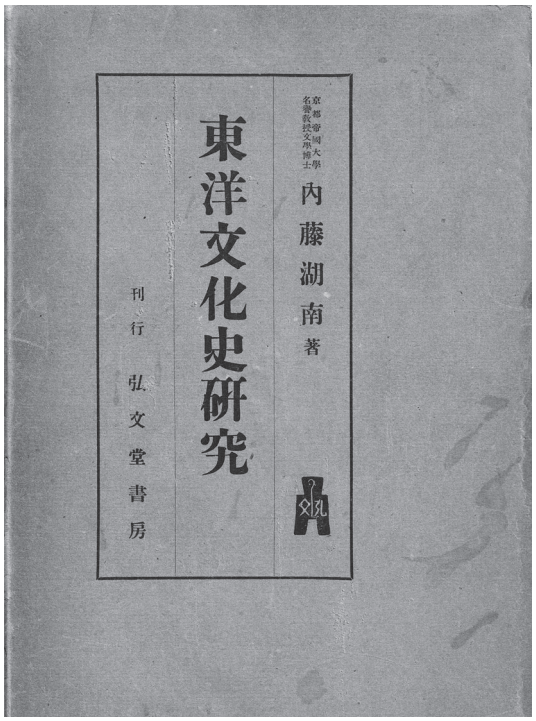

図12（1936）

モグ言って居る形」と説明している点などは興味をひく。一九二一（大正一一）年の『考古学雑誌』第一二巻第一号に掲載された「殷虚に就て」なども収められている。そのほか、先に述べた「邪馬台国畿内説」や「唐宋変革論」などもよく知られており、『支那論』（一九三八）、『支那絵画史』（一九四〇）、『支那上古史』（一九四四）など、その専門領域は広範である。最近では『東洋文化史研究』の中国語訳（復旦大学出版社　二〇一六）なども出版されている。

そのほか、湖南は実物資料の蒐集という点でも優れた鑑識の眼を有していた。最古の部首別漢字字典とされる後漢の許慎による『説文解字』は和帝の永元一二（一〇〇）年に完成し、安帝の建光元（一二一）年に息子の許沖によって奉呈されたとされているが、唐の元和一五（八二〇）年に書写されたと推定される、すなわち北宋の徐鉉・徐鍇が校訂する前の『説文解字木部残巻』（縦二五・四㎝×全長二四三㎝を測り、木部の一部の六葉一八八字を記す。跋や鑑蔵印から南宋の宮廷に所蔵されていたことが判明）と遭遇、それを湖南は清末の莫友之から譲り受けて所有、死後、それは大阪の武田科学振興財団杏雨書屋の所蔵となり、現在は国宝指定されている。なお篆書部分の懸針篆を原本に想定するとき、この書写本の淵源の時代は魏晋にまで遡る可能性があると思料される。

四）諸橋轍次（一八八三―一九八二）は漢字の研究者であり（新潟県出身）、一九〇八（明治四一）年に東京高等師範学校を卒業後、同校に勤務、一九二五（大正一四）年に大修館の創業者鈴木一平から『大漢和辞典』の構想をもちこまれ、一九二七（昭和二）年から着手、徹底的な語彙の収集と出典の明確化を基本方針とした世界最大の辞書づくりが始まることとなった。一九三二年（昭和七年）あたりから原田種成が加わって実質的な辞書編纂が進捗するようになるのであるが、十数年をかけて積み上げてきた『大漢和』は一九四五（昭和二〇）年二月二五日の東京大空襲による大修館本社の罹災により、組みあがっていた印刷用の版は全て焼失、そのような状況下で一九五〇（昭和二五）年に、鎌田正・米山寅太郎が中心となり、完成していた巻と校正刷りを基に再スタートを切り、一九五四（昭和二九）年一〇月に石井茂吉作成の写真植字を使用した『大漢和辞典』第一巻の組版を開始、一九五五年一一月に第一巻を発行、一九六〇（昭和三五）年に遂に全

一三巻（本体一二巻及び索引巻）を完成するという言葉では言い尽くせない労苦があった。この間、諸橋は大東文化学院、国学院大学において講義、のちに都留文科大学初代学長の任も果たした。一九六一年以降も修訂作業をすすめ、一九七二（昭和四七）年には『中国古典名言辞典』、一九八二（昭和五七）年には『廣漢和辞典』（図13）を刊行し、同年九九歳で亡くなった。なお諸橋亡きあと一九九〇（平成二）年の修訂第二版のおりに「語彙索引」（第一四巻）を、二〇〇〇（平成一二）年には八〇四漢字と三万三千余の語彙を収集した「補巻」（第一五巻）を出版、二〇一八年一一月二八日には大修館書店創業一〇〇周年を記念してUSBメモリーによる「大漢和辞典デジタル版」の出版がなされた。これら『大漢和』『廣漢和』に関わった人々は必ずしも専門的な甲骨文・金文の研究者というわけではなかったが、『説文解字』の篆文や甲骨文・金文の解字例あわせて一四〇〇〇種を登載したということはやはり大きな功績と言わざるを得ない。

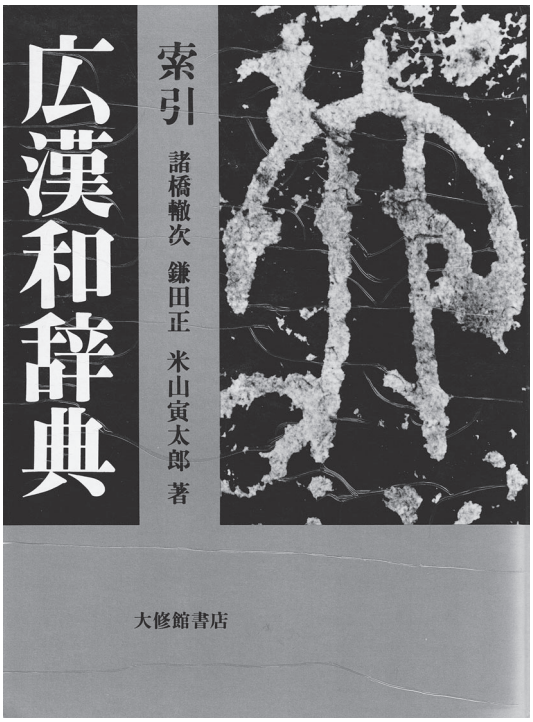

図13（1982）

五）加藤常賢（一八九四－一九七八）は中国古代学者であり（愛知県出身）、一九二〇（大正九）年に東京帝国大学を卒業したあと、京城帝国大学、広島文理科大学教授となり、一九三八（昭和一三）年に「支那古代家族制度」で文学博士号を取得、一九四七（昭和二二）年に東京大学中国哲学科教授となる。一九五一（昭和二六）年から東大文学部中国哲学研究室内に日本甲骨学会（一九八〇年まで『甲骨学』を一二号まで刊行）が置かれており、「幸字について」などの論文を積極的に掲載している。一九五五（昭和三〇）年に定年退官したあとは二松学舎大学教授を務めた。著書としては『荀子』（一九二三）、『支那古代家族制度研究』（一九四〇）、『中国思想史』（監修一九五二）、『教育漢字字源辞典』（一九五六）、『漢字の起原』（一九七〇：図14）、『漢字の発掘』（一九七一）、『中国故事成語辞典』（一九七九）、『中国古代文化の研究』（一九八〇）などがある。『漢字の発掘』序の中で「『漢字の起原』は形・音・義の三者に亙って、厳密に書いた研究書であった」とし、『中国故事成語辞典』の解説においても「甲骨文字が神に対する占いのことばを亀の甲羅（腹甲）や動物の骨に刻んで保存したこと」「神にささげる青銅器類に、その製作目的・制作者名などを鋳たり彫ったりした金文」など「この原始漢字が神とつながりをもったということは、文字に一種の神聖性を認めていたことを示すとともに、

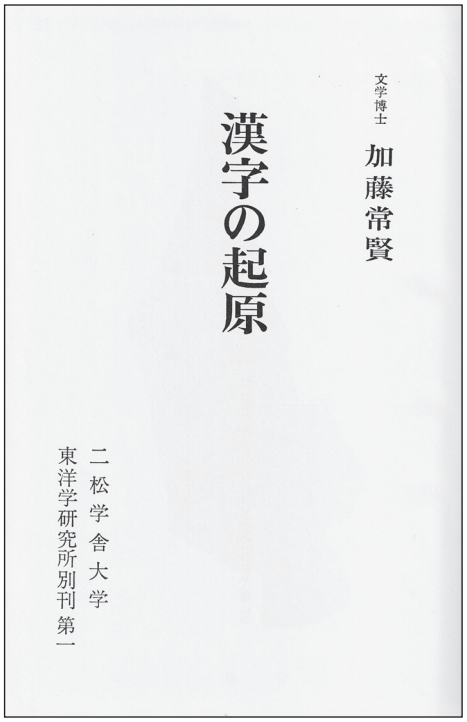

図 14（1970）

爾後の漢字という文字の古代文化における位置を規定」したとの立場で研究を進めた。

六）島邦男（一九〇八－一九七七）は中国古典学者であり（青森県出身）、日本の本格的な甲骨学家のひとりである。一九三〇年に官立弘前高等学校を、一九三三年に東京帝国大学支那文学科を卒業、東大時代に恩師宇野哲人（一八七五－一九五六）の影響もあって甲骨文研究に入ったようである（宇野哲人は「甲骨文偽作説」の立場にあった）。卒業後、満州新京（長春）師範学校等をへて、一九五〇年から一九七四年の定年退職まで弘前大学文理学部に務め、この間、一九六一年に『殷墟卜辞の研究』により、東京大学より文学博士号を授与されている。甲骨文研究による博士学位の嚆矢とされる。弘前大学での『祭祀卜辞の研究』（一九五三）を初め、日本甲骨学会への「卜辞に於ける先王の称謂」（一九五一）、「貞人補正」（一九五六）、「亜の官職」（一九五八）、「甲骨卜辞地名通検」（一九五八）など、甲骨文手写の論文を幾つも寄稿している。とりわけ『殷墟卜辞綜類』（一九六七）及び『増訂殷墟卜辞綜類』（一九七一：図15）は甲骨文研究の古典的名著と称されている。

七）池田末利（一九一〇－二〇〇〇）は日本の中国哲学者であり（福岡県出身）、大東文化学院を卒業後、一九三六（昭和一一）年に広島文理科大学を卒業し、一九三八年から一九四一年まで北京大学で学び、一九五五年に「中国に於ける祖先崇拝の溯源的研究、並にその天・地神崇拝との関係」で東京大学文学博士となり、広島大学文学部に奉職、

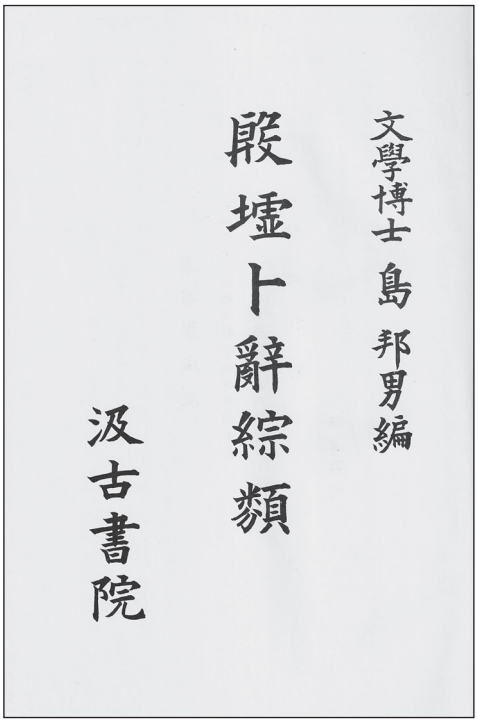

図 15（1971）

一九七三年に定年退官したあと名誉教授となり、大東文化大学教授や学長を務めた。日本甲骨学会に所属し「殷虚書契後編釈文《一～六》」（一九五六～一九六四）、「島氏『殷虚卜辞研究』を読む《一～二》」（一九五九～一九六〇）などを寄稿するとともに『中国古代宗教史研究』（一九八一）を出版して学会に大きな貢献を果たした。

八）赤塚忠（一九一三－一九八三）は中国古代思想史を専門とする学者であり（茨城県出身）、一九三六年に東京帝国大学支那哲学科を卒業、戦争中は中国大陸に赴き、陸軍大尉として敗戦を迎え、一九五五年以来、東京大学に勤務し、一九六二（昭和三七）年に学位論文「周代文化の研究」で文学博士号を取得した。一九七四年に定年退官しているが、加藤常賢の後任として、甲骨文や金石文を研究、日本甲骨学会にも幹事として所属し「殷王朝における河の祭祀とその起源」（一九五六）、「陳夢家氏『殷虚卜辞綜述』について」（一九五八）、「西周初期金文考釈《一～二》」（一九五九～一九六〇）などを掲載するとともに『中国古代の宗教と文化』（一九七七）、『赤塚忠著作集』全七巻（一九八六～一九八九）などを出版した。著作集の内容は「中国古代文化史」「中国古代思想史研究」「儒家思想研究」「諸子思想研究」「詩経研究」「楚辞研究」「甲骨・金文研究」などから成る。一九八三年に逝去した。

九）藤堂明保（一九一五－一九八五）は中国語学者・中国文学者であり（三重県出身）、一九三八年に東京帝国大学支那哲学科を卒業、外務省研修員として北京へ留学、戦時中は通訳として軍務に従事し、一九四七年に復員、第一高等学校教授を経て、一九五〇年以降、東京大学で教え、教授となるが、東大紛争で全共闘を支持し、一九七〇年に辞職、一九七二年からは早稲田大学客員教授、一九七六年からは日中学院長などを務めた。専門は音韻学で、従来の字形の異同を重視する方法論から、字音の異同を重視する方法論に基づく「単語家族説」を提唱した。一九五七年に『中国語音韻論』（江南書院）を出版、一九六二年には「上古漢語の単語家族の研究」で東京大学から文学博士号を授与された。東京大学の加藤常賢とともに、一九七〇年に岩波書店から刊行された白川静の『漢字』の全否定を行ない、白川からの学問的・論理的な反論を受けた。主な著書に『漢字の知恵』（一九六五）、『漢語と日本語』（一九六九）、『漢字語源辞典』（一九七一）、『中国語概論』（一九七九）、『中国語音韻論―その歴史的研究―』（一九八〇：光生館）、『中国の歴史と故事』（一九八五）などがある。中学生ころだったか、藤堂氏が松山へ講演に来られた時、東大の偉い先生がお見えになるということで、県民館に拝聴にいったことを覚えている。

一〇）松丸道雄（一九三四－　）は甲骨金文学・中国古代史の専門家であり（東京出身）、有名な篆刻家松丸東魚（一九〇一－一九七五：著作に『東魚撫古印存』一九七五、『松丸東魚作品集』一九七八などがある）の子息である。東京大学文学部東洋史学科を卒業後、東京大学東洋文化研究所教授等を経て、現在は名誉教授であり、近年、中国西泠印社名誉社員ともなられた。「私が、この甲骨学にはじめて手を染めたとき、書店の店頭には、董作賓『甲骨学五十年』台北・藝文印書館、一九五五年が並んでいて、私はこの小さな本によって、はじめて甲骨の概要を学んだ」「私が若かったころのこの史料の研究環境は、

いま著しく変わった。一論文作成の資料蒐めのためには、百点を超える甲骨著録書をひと通り頭から点検して摹本を作成する必要上、東京大学東洋文化研究所、文学部中国哲学研究室、東洋文庫だけでは足りず、京都大学人文科学研究所近くに数日宿泊して通わねばならぬなど苦労があった。ましてコピー機はなく、図書館では概してインクの使用が許されないため、鉛筆でトレースして、夜間そのインキングに没頭した。今昔の感に堪えない」（『甲骨文の話』二〇一七）と記されている。この頃のことであろうか、『甲骨学』第七～第一〇号には「日本散見甲骨文字蒐彙（一～四）」（一九五九～一九六四）や「『一九五八～一九五九年』殷虚発掘簡報について」（一九六一）、またM.B.クリュコフの「卜辞に見えた『衆』と『衆人』について」（一九六四）の翻訳などを試みており、「甲骨金文関係文献目録」（一九五九～一九六一）の加藤道理氏とともに日本甲骨学会の幹事を務めたりされている。そのほかの著書に『中国史』（一九九七）、『論集　中国古代の文字と文化』（一九九九）、『殷周秦漢時代史の基本問題』（二〇〇一）、それに先の『甲骨文の話』（二〇一七）などがある。『甲骨文の話』には「甲骨文略説」（一九五九）、「殷人の観念世界」（一九八九）、「漢字形成期の字形」（一九九五）、「漢字起源問題の新展開」（一九九九）、『甲骨文合集』の刊行とその後の研究」（二〇一七）などが収められている。松丸道雄先生とは依水園・寧楽美術館での理事会・評議員会のおりに、中村記久子二代目館長によりお引き合わせをいただいたが、以後、賀状や献本の栄に浴している。

一一）貝塚茂樹（一九〇四－一九八七）は東洋学者・中国古代史学者であり（東京府出身）、一九二八（昭和三）年に京都帝国大学文学部史学科を卒業したあと、一九三二年に東方文化学院京都研究所研究員となり、一九四九（昭和二四）年四月の改組に伴い京都大学人文科学研究所教授となり一〇月から所長をつとめた（一九五五年三月まで）。一九五一（昭和二六）年の日本甲骨学会の立ち上げにも尽力、「甲骨学の進むべき道（上）（下）」（一九五一～一九五二）、「董作賓氏を悼む」（一九六四）などを著わし、この間、一九六一（昭和三六）年に「甲骨文時代区分の基礎的研究」で京都大学から文学博士号を取得している。一九六八年に京都大学を定年退官し、一九八一年からは東方学会会長もつとめた。主な著作に『諸子百家』（一九六一）、『史記』（一九六三）、『中国の歴史（上）（中）（下）』（一九六四、一九六九、一九七〇）、『論語訳注』（一九七三）、『貝塚茂樹著作集』全一〇冊（一九七六～一九七八）などがあり、特に甲骨文・金文に関しては著作集のうち『中国の古代国家』（第一巻）、『中国古代の社会制度』（第二巻）、『殷周古代史の再構成』（第三巻）などの考察が深い。特に第一巻の「朝と闕―門と広場―」「中国古代人の国家像」「東周王朝の成立と諸侯国の独立」、第三巻の「亀卜と筮」「金文に現れる夏族意識」「殷末周初の東方経略について」などは示唆に富む。そのほか編著として『古代殷帝国』（一九六七；新装版一九八四：図16）があり、奈良女子大学大島利一教授の「竜骨の秘密」、神戸大学の伊藤道治助教授の「地上と地下と」、愛知大学の内藤戊申教授の「殷人の日日」、立命館大学の白川静教授の「卜辞の世界」、京都大学の樋口隆康助教授の「殷人の故郷」などが収められている。白川静、内藤戊申、伊藤道治らは日

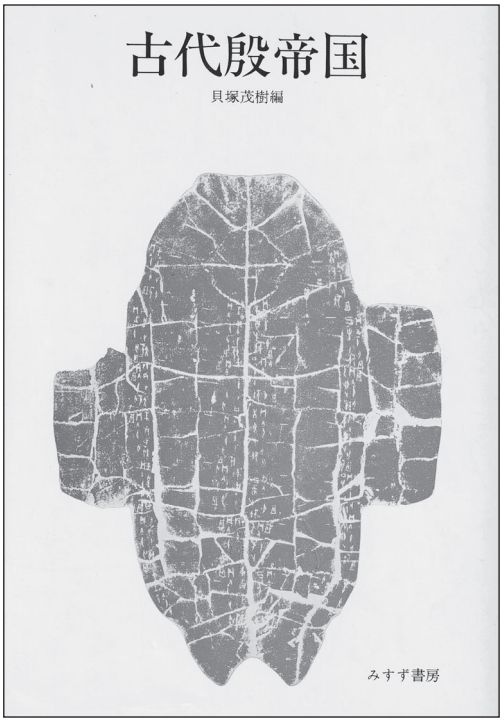

図 16（1967）

本甲骨学会に所属し「甲骨学」に白川は後述の「釈南」（一九五四）、内藤は「金文札記」（一九五六～一九六四）、伊藤は「出土資料による西周史再構成の試ろみ」（一九六一）などの論文を寄稿している。

一二）白川静（一九一〇－二〇〇六）は漢文学者・東洋学者であり（福井県出身）、一九三〇（昭和五）年に京阪商業を卒業、一九三三（昭和八）年に立命館大学専門部文学科国漢学科に入学、一九三四年に文部省中等教育国語科免許を受け、一九三五年から立命館中学校教諭となり、一九三六（昭和一一）年に立命館大学専門部国漢科を卒業、一九四一（昭和一六）年に立命館大学法文学部漢文学科に入学、一九四三（昭和一八）年に卒業して同年に立命館大学予科教授、一九四四（昭和一九）年に専門学部教授、戦後の一九四八（昭和二三）年に文学部助教授、一九五四（昭和二九）年より文学部教授を務めた。一九五五（昭和三〇）年より大阪大学文学部、名古屋大学文学部の講師も務め、一九六二（昭和三七）年には博士論文「興の研究」により京都大学より文学博士号を授与された。一九七六（昭和五一）年に六六歳で定年退職、特別任用教授になり、一九八一（昭和五六）年には名誉教授の称号を受けている。

初期の論文としては「卜辞の本質」（一九四八）、「帝の観念」（一九四九）、「殷の族形態」（一九五〇）などがあり、一九五一年に設立の「日本甲骨学会」にもその当初から意欲的に参加、『甲骨学』にも「釈南」（一九五四：図17）、「蔑暦解」（一九五六）などを寄稿して

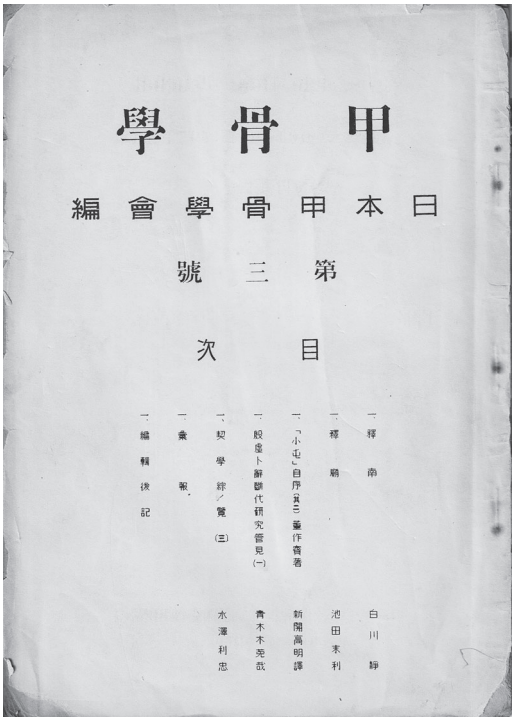

図 17（1954）

いる。著書としては『甲骨金文学論叢』一〇集（一九五五～一九六二）、『稿本詩経研究（通論篇・解釈篇）』（一九六〇；再版一九七〇）、『殷・甲骨文集』（一九六三）、『金文集』（一九六四）、『金文通釈』（一九六二～一九八一）、『説文新義』一五巻、別巻一（一九六九～一九七四）などがある。特に『新義』巻二所載の「告部二一」「口部二二」の新義、すなわち「載書（の器）のときには字形やや横長、かつ扁に用いることは殆んどない」、「（口耳の口と載書の口の）「両者の形義の相違を明らかにしないために生じる混乱」を指摘し、仮説的に、含・名・吾・君・咨・召・問・台・呈・右・啻・吉・周などの一群と嗌・喤・咳・噫・唯・咄・噂・嘯・吐・唁などの一群を分離して考察し、その本質的相異を指摘した学史的意義は極めて大きい。その後も、著作は『漢字』（一九七〇）、『金文の世界』（一九七一）、『甲骨文の世界』（一九七二）、『中国の古代文学』（一九七六）、『初期万葉論』（一九七九）などと続いていくのであるが、以後の論文・著書・書評等の峰々は、周知のとおり枚挙に遑がなく、ここにすべてを採りあげることは控えておきたい。白川静はその後も「志あるを要す。恒あるを要す。識あるを要す」と言わんばかりの姿勢でひたむきにして精力的な研究を続け、字書三部作である『字統』（一九八四）、『字訓』（一九八七）、『字通』（一九九六）を完成していくのである。二〇〇三年には、津崎幸博氏修訂・津崎史氏校正による一般にも理解しやすい『常用字解』が出版された。

一般向けといえば、一九九九（平成一一）年三月から二〇〇四（平成一六）年一月まで「文字講話」が国立京都国際会館等で開講され、二〇〇六年の逝去のおりまで続けられた。わたくしも何度か聴講させていただいたが、壇上の先生は大きな鳥の子用紙に甲骨文・金文を自在に書して講演され、会場いっぱいの聴衆も喜ばしげに講義に耳を傾け、講話のあとはグループごとに記念撮影までして、心行くまで学びと交わりを楽しませていただいたのである。聴衆の中には白川博士の教え子、立命館大学文学部中国文学科卒業の方々も数多く交わっておられたが、主催者によれば博士は特定非営利活動法人のために無償で講義を提供しておられたとのことであった。わたくしの手元には文字文化研究所による「白川静『文字講話』Ⅰ～Ⅶ（二〇〇〇～二〇〇六）」が保管されているが、これは白川学の最後の到達点を表現したものとしてきわめて重要である。白川博士は生涯現役の碩学であった。

先生は二〇〇六年一〇月三〇日に亡くなられたが、認定ＮＰＯ法人文字文化研究所による「白川静先生を偲ぶ会」は二〇〇七（平成一九）年、二月一八日（日）の午前一一時から午後一四時まで、ホテル日航プリンセス京都にて行われた。二〇一〇（平成二二）年には生誕一〇〇年を記念し立命館大学内に蔵書や直筆原稿一八〇〇〇点を収蔵した「白川静文庫」が開設され、同時に『白川静文庫目録』も公刊された。白川静博士との出遭いと学術的業績等については、後程「白川静博士との出遭いとわたしの印学研究」の項目の中でふれることにする。後述するように、白川静博士との直接・間接のやりとりは「金印発見二〇〇年」の一九八四年あたりから亡くなられる二〇〇六年あたりまで続き、貴重な学恩をいただいたのである。

一三）伊藤道治（一九二五－　）は中国古代史学者であり（愛知県出身）、出土資料によって殷周史の研究を進めた。一九四九年に京都大学文学部史学科を卒業したあと、日本甲骨学会にも所属して研究をすすめ、一九七三年に「出土資料を中心とする殷周史の研究」で京都大学から文学博士号を授与された。著書に『古代殷王朝のなぞ』（一九六七）、『中国古代王朝の形成　出土資料を中心とする殷周史の研究』（一九七五）、『図説中国の歴史一　よみがえる古代』（一九七六）、『中国古代国家の支配構造　西周封建制度と金文』（一九八七）などがあり、大きな貢献を果たされてきた。なお『白川静博士古稀記念中国文史論藪』（『立命館文学』第四三〇～第四三二号　一九八一）の中にも伊藤氏の「語詞〝叀（惟）〟の用法に関して」という論文が掲載されている。

一四）考古学京都学派における甲骨文・金石文研究

内藤湖南（一八六六－一九三四）らにより創始された京都支那学の伝統はその後、京都大学考古学派とも連携を深めていくことになる。濱田耕作（一八八一－一九三八）は日本の代表的な考古学者であり（大阪府出身）、「日本近代考古学の父」とも呼ばれる存在であり、青陵と号した。第三高等学校を経て、一九〇二（明治三五）年に東京帝国大学史学科に入学、在学中より『国華』の編集や『人類学雑誌』に考古学・美術史の論文を寄せていた。一九〇九（明治四二）年に京都帝国大学文化大学講師として京都に移り、京都大学に日本で初めての考古学教室を創設した。一九一三年から一九一六年にかけてイギリスに留学してロンドン大学のW.M.F.Petrie（一八五三－一九四二）による『考古学の方法と目的（Methods and Aims in Archaeology）』（一九〇四）等によく精通し、第一次世界大戦中の一九一六（大正五）年に『考古学通論』を上梓、一九一七（大正六）年に教授となり、文学博士号も取得した。翌一九一八（大正七）年に『希臘紀行』、一九一九（大正八）年に『南欧游記』、そして一九二二（大正一一）には『通論考古学』（図18）などを著わし、その考古学の領域は幅広く、一九二五年には東亜考古学会を同人らと創立し、以後も『ミハエリス氏美術考古学発見史』（一九二七）、『博物館』（一九二九；一九四一年に『考古学入門』と改題）、『東亜文明の黎明』（一九三〇）、『慶州の金冠塚』（一九三二）、『新羅古瓦の研究』（一九三四）、『考古学研究』（一九三八）、『日本美術史研究』（一九四〇）、『東洋美術史研究』（一九四二）、『東亜考古学研究』（一九四三）などを出版した。大阪府茨木市所在千提寺東家のキリシ

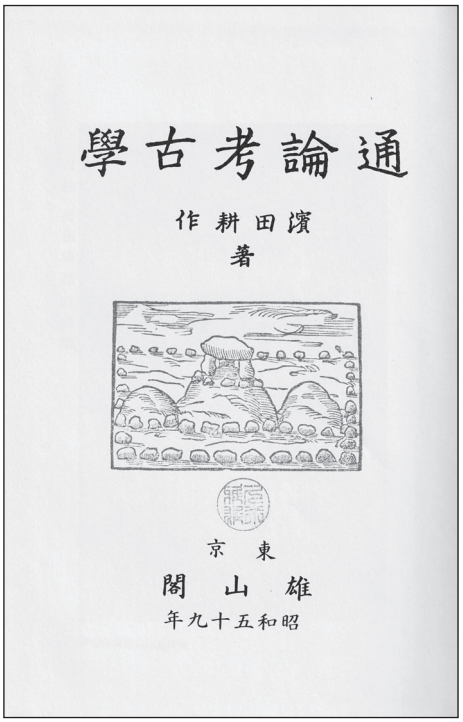

図18（1922）

タン遺物調査に伴う『京都帝国大学考古学研究報告』第七冊（一九二二）の刊行や『天正遣欧使節記』（一九三一）の出版なども「キリシタン考古学の草分け」として重要な意味をもっている。「殷墟発見の大石磬」（『東亜考古学論攷』）なる論文も甲骨文への深い関心を示す大切な一作である。一九三七（昭一二）年に京都大学総長に任じられたが、翌年、病のため五七年の生涯を閉じた。

梅原末治（一八九三－一九八三）は、日本の東洋考古学者であり（大阪府出身）、一九一三（大正二）年に同志社普通学校を卒業したあと、濱田耕作（青陵）に見いだされ薫陶を受けた。一九一四（大正三）年に京都帝国大学文科大学陳列館助手となり、その後、朝鮮総督府古跡調査委員、東方文化学院京都研究所所員を経て、一九三三（昭和八）年に京都帝国大学文学部史学科助教授となり、一九三九（昭和一四）年には「支那青銅器時代の研究」で文学博士となり、同年、教授となり、一九五六（昭和三一）年には名誉教授となった。著書に『弥生土器形式分類聚成図録』（一九一九）、『鑑鏡の研究』（一九二五）、『銅鐸の研究』（一九二七）、『漢三国六朝紀年鏡集録』（一九三一）、『支那考古学論攷』（一九三八：図19）、『日本考古学論攷』（一九四〇）、『朝鮮古代の文化』（一九四六）、『朝鮮古代の墓制』（一九四七）などがあり、殷周関係の著述としては『河南安陽遺物の研究』（一九四一）、『殷墓発見木器印影図録』（一九五九）、『殷墟』（一九八五）などがあり、諸分野にわたって大きな貢献を果たした。

同じく濱田青陵門下にあって、日本考古学の領域において大きな貢献を果たした者に大阪府出身で奈良県橿原考古学研究所初代所長及び関西大学名誉教授となった末永雅雄（一八九七－一九九一：一九四八年に『近畿古文化の研究』で龍谷大学より文学博士号を取得）や兵庫県出身で京都大学名誉教授・文学博士となった小林行雄（一九一一－一九八九）などがあることはよく知られており、その日本考古学における学術的評価もきわめて高いものであるが、本稿で扱っている殷周史や中国古代文字学の研究とは直接的には関連が薄いのでここでは触れないことにする。

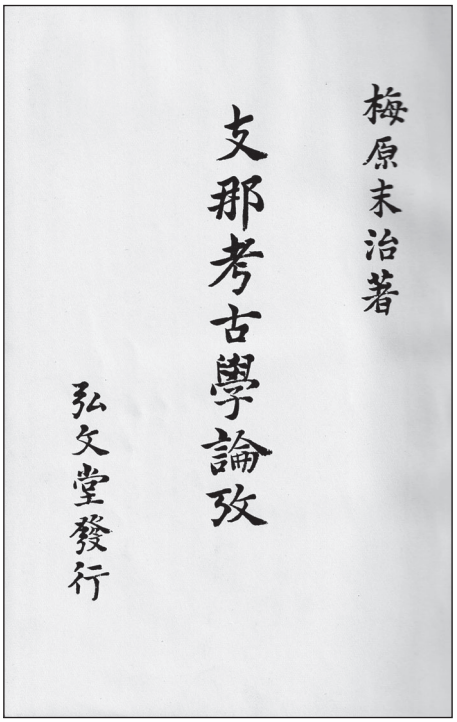

図19（1938）

殷周史と関わる考古学京都学派の重要な研究者として、ほかに東洋考古学者・水野清一（一九〇五－一九七一：兵庫県出身）を挙げることができる。京都帝国大学を卒業したあと、一九四九（昭和二四）年に京都大学人文科学研究所教授となり、「殷商青銅器編年の諸問題」（『東方学報京都第二三冊』一九五三）、『世界考古学大系』第六巻　東

アジアⅡ　殷周時代（一九五八）、『殷周青銅器と玉』（一九五九）などを著わした。一九六二（昭和三七）年に「雲崗石窟系譜」で京都大学から文学博士号を取得、一九六八年に定年退官、名誉教授となった。「京大イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊」を率い、その成果を一九六七年、一九六九年、一九七一年に刊行している。

なお一九五九年に水野清一・小林行雄編の本格的な『図解考古学辞典』が出版され、われわれ考古学徒を大いに励ましてくれた。立命日本史入学のお祝いとしてこの一本を叔母から贈呈されたことを覚えている。

樋口隆康（一九一九―二〇一五：福岡県出身）は一九四三年に京都帝国大学を卒業後、一九五七（昭和三二）年に敦煌を調査（貝塚茂樹氏は『古代殷帝国』あとがきの中で樋口助教授を「一九五七年五月、中国視察考古学団の一員としてはじめて鄭州の殷代遺跡の発掘を見学して帰られた」人物と評している）、一九五九（昭和三四）年以降はインド、アフガニスタン、パキスタンなどの仏教遺跡を調査、一九七五（昭和五〇）年に教授となり、一九八三（昭和五八）年に定年退官、名誉教授となった。主な著作として『中国の銅器』（一九六七）、『古代中国を発掘する』（一九七五）、『古鏡』（一九七九）、『ガンダーラへの道　シルクロード調査紀行』（一九八〇）、『シルクロードから黒塚の鏡まで』（一九九九）、『アフガニスタン　遺跡と秘宝』（二〇〇三）、『図説　蘇るバーミヤーン』（二〇〇三）などが挙げられる。貝塚茂樹『古代殷帝国』一九六七：新装版一九八四）の中には「殷人の故郷」が収められていることは先にふれたとおりである。京都大学のほか、奈良県立橿原考古学研究所所長、名勝依水園・寧楽美術館理事長などの要職も務められ、二〇一五年に九五歳で逝去された。なお執筆時期は不明であるが、樋口隆康氏の草稿『西周銅器の研究』が「西周銅器出土地点と文化圏地図」とともに錫安文庫に家蔵されている。

最後に考古学京都学派で採りあげておきたいのは林巳奈夫（一九二五―二〇〇六：神奈川県出身）である。氏は一九五〇（昭和二五）年に京都大学文学部史学科を卒業後、平凡社編集部に勤務していたが、一九五七年に京都大学人文科学研究所に入り、一九七五（昭和五〇）年に文学博士となり、教授に昇格、一九八九（平成元）年に名誉教授となった。特に青銅器・玉器を専門とするが、「殷周青銅器に現れる竜について」（『東方学報京都第二三冊』一九五三）、日本甲骨学会にも「安陽殷虚哺乳動物群について」及び「甲骨金文関係文献目録」（一九五八）などの論文を寄せ、そのほか『中国殷周時代の武器』（一九七二）、『殷周時代青銅器の研究』（一九八四）、『春秋戦国時代青銅器の研究』（一九八九）、『中国古玉の研究』（一九九一）、『中国古玉器総説』（一九九九）などの業績がある。

特に筆者にとっては『甲骨学』第一一号（一九七六）に載せられた一九七三（昭和四八）年二月四日に京都大学人文科学研究所で開催された「西周金文の辨偽をめぐって」の座談はおもしろい。そこでは今まで紹介してきた松丸道雄先生を司会に、伊藤道治・貝塚茂樹・林巳奈夫・樋口隆康のほか、大島利一・小南一郎・近藤喬一・内藤戊申・永田英正らの諸先生方が、一九六八年一一月一五日に立ち上げた「辨

偽の会」のその後の成果を互いに持ち合って論議するという趣旨のもので、これは博物館・美術館展示においても真偽の鑑別なく展示されている現実がままあるので興味深く感じている。真偽の鑑定には「非見真器、不能定偽」は王道であり、古物鑑定を誤認した研究は蜃気楼の中の空中楼閣にすぎない。永く従事してきた『印章研究』においては、その真偽の鑑定を含む研究の方法論を開示しているので『日本印章史の研究』（二〇〇四）や『はんこ』（二〇一六）、そして『寧楽美術館の印章』（二〇一七）や「中国古印断代考」（二〇一七）などを参照されたい。

一五）篆刻家園田湖城（一八八六―一九六八）及び湖城門下による古璽印研究と印学

園田湖城は内藤湖南らと交流をもった日本の篆刻家である。一八九八（明治三一）年に京都市立第三高等小学校修行後、一九一三（大正二）年頃から京都の平安印会に作品を出品しはじめ、一九一九（大正八）年に『平盦過眼古璽』を編集、翌年あたりから内藤湖南の紹介で京都藤井家にて中国古印を蒐集整理し始め、一九二四（大正一三）年に同風印社を設立、一九二六（昭和元）年に、藤井有鄰館開設とともに主事として迎えられ、後には寧楽美術館の評議員も務めた。この間、『平盦蔵印』（一九二一）、『古璽印々』（一九二七）、『篆府』（一九三一）、『古鈐印々』（一九三七）、『黄龍硯斎周秦古鈐』（一九三八）、『黄龍硯斎周秦古鈐続』（一九四〇）、『平盦蔵古官印』（一九四一）などの成譜に努めた。このうちの黄龍硯斎とは江西省臨川の人であり、江寧提学使を務めた李瑞清（一八六七―一九二〇）である。湖城は一九五二（昭和二七）年に京都国立博物館の門額を揮毫したことでも有名であるが、翌一九五三（昭和二八）年には日本印人協会創立のため上京、湖城が議長を務め、準備委員として加藤紫山と梅舒適が出席した。一九六七（昭和四二）年五月二八日に京都の東福寺山内の東光寺において「日本印人展」が東山印社主催で開催され、「日本印人篆刻・遺墨・著書展観目録」によれば、園田湖城・原徂山・中田勇次郎・松谷石韻・藤枝晃・水田紀久ら三〇名の名前が記され、書画・刻印・印譜・参考文献の各分野中、古典的な価値をもつ優品が展示されていたことを明らかにしている。このように園田湖城は大正・昭和期の古璽印蒐集を促し、尽力し、「靄々荘」（藤井有鄰館）、「梅華堂」（大谷大学）、「穆如清風室・平盦」（園田湖城）所蔵印などの成譜につとめ、蒐集から研究への素地をつくろうと努力した。一九六八（昭和四三）年に没したが、弟子に篆刻家の加藤慈雨楼（一九〇四―二〇〇〇）や水野恵（一九三一―　）がいる。東洋学者で『日本の古印』（一九七六）を著わした神田喜一郎（一八九七―一九八四）や敦煌学者で『文字の文化史』（一九七一）を著わした藤枝晃（一九一一―一九九八）も古璽印に関心を示した。一九六九年に神田喜一郎監修・加藤慈雨楼編の『平盦攷蔵古璽印選』が出版されている（図20）。そしてこの加藤の室外に、藤井有鄰館理事であった藤井守一により紹介され、また、日本の篆刻家としては初めての文化勲章受章者である東京の小林斗盦によっても推薦された、一九八三年から二〇〇〇年にかけて加藤の薫陶を受けた、考古学者兼印学家の久米雅雄（一九四八―　）がいる。

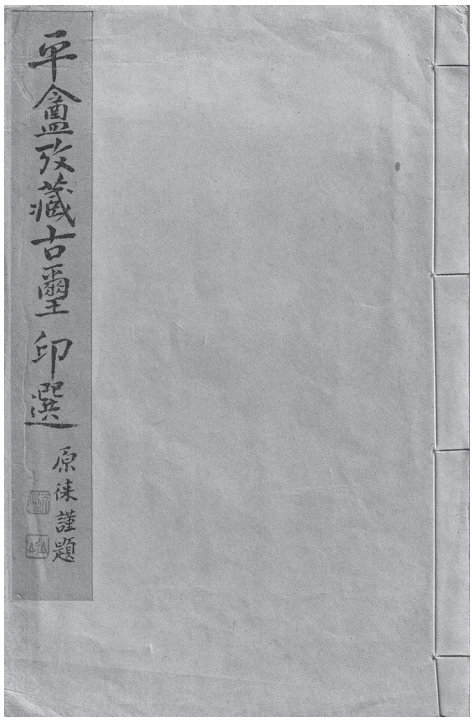

図 20（1969）

三．わたしの印学―「金印奴国説への反論」（一九八三）から「日本の花押と戦国大名の印章」（二〇一八）までの書誌

一九四八年に愛媛県の松山に生を享けたわたくしの印学は公式には一九八三（昭和五八）年の「金印奴国説への反論」（『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』所収：図21）に始まる。その淵源は厳密には一九六八（昭和四三）年の立命館大学文学部史学科〔日本史学専攻：考古学・古代史〕三回生のおりの北山茂夫先生のゼミでの同名の研究発表から始まる。その後の著作や論文を年次別に追ってみると、そのほとんどは大阪府教育委員会文化財保護課の考古学および美術工芸の専門職員となってから以降のものであるが、「新邪馬台国論―女王の鬼道と征服戦争―」（『北山茂夫追悼日本史学論集　歴史における政治と民衆』日本史論叢会　一九八六：図22）、「『魏志倭人伝』略解」『考古学が語る戦争と差別』（大阪人権歴史資料館　一九八九）、「中国古印の考古学的研究」（『文部省科学研究費実績報告書』一九八九：図23）、「日本古代印研究―その歴史的・時系列的展開と律令国家の本質」『日本古代印の基礎的研究』（国立歴史民俗博物館　一九八九：図24）、「『魏志倭人伝』にあらわれたる『邸閣』について」（『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第二集　一九九三）、『府立大阪博物場旧蔵貨幣図録第一冊』（大阪府教育委員会　一九九八）、「大阪府立近つ飛鳥博物館所蔵　駝鈕銀印『晋率善羌中郎将』印とその史的周辺」（『大阪府立近つ

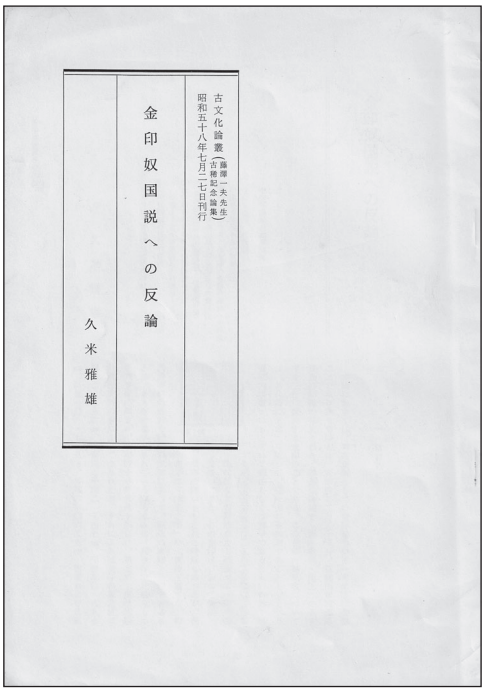

図 21（1983）

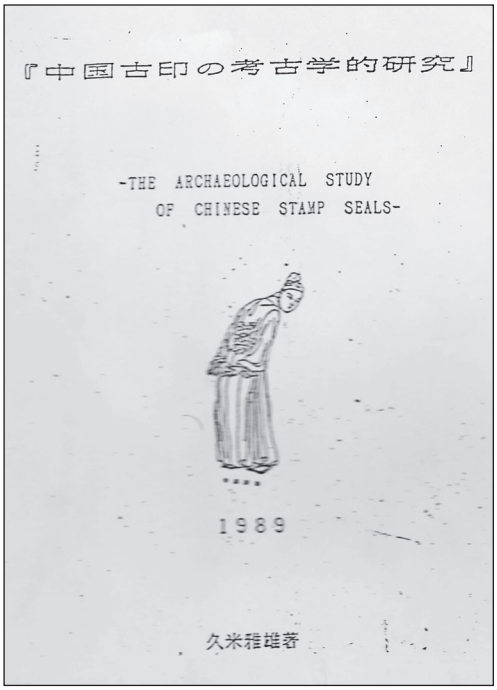

図 23（1989）

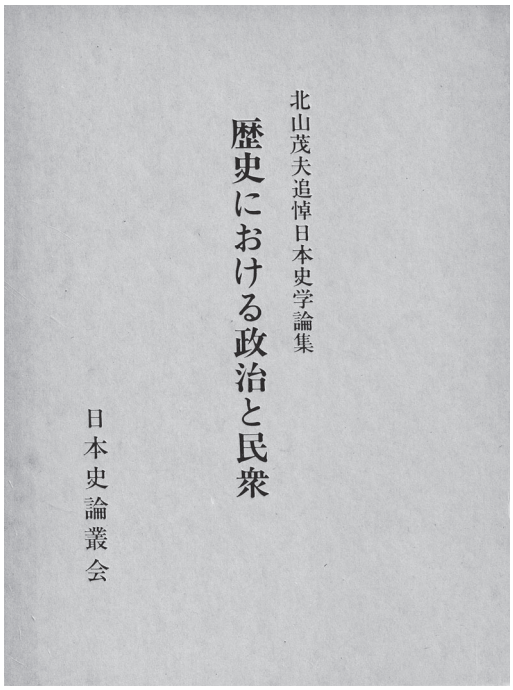

図 22（1986）

飛鳥博物館館報七』二〇〇二）などを挙げることができる。最後の大阪府立近つ飛鳥博物館発行の論文は中国杭州の学術団体、創立一〇〇周年の西泠印社の入選論文（「晋率善羌中郎将銀印及周辺歴史之研究」西泠印社　二〇〇三）となり、以後の学際が始まることになる。

一九九七年以来、考古学京都学派出身の和田晴吾先生が立命館大学で率先された『立命館大学考古学論集』全六冊では「『大坂城跡』出土の円形印章について―或る吉利支丹大名の遺産―」（Ⅰ　一九九七）、「倭の五王と将軍章―東アジアの国家秩序をめぐって―」（Ⅱ　二〇〇一）、「東西印章史論序説―中国の印章とシルクロードの印章とオリエントの印章―」（Ⅲ　二〇〇三）、「国宝金印『漢委奴国王』の読み方と志賀島発見の謎」（Ⅳ　二〇〇五）、「福岡県三雲遺跡出土

図 24（1989）

刻書土器の文字学的検討―伊都国祭祀の一断面―」（Ⅴ　二〇一〇）、そして和田晴吾先生定年退職記念論集には「景教印の研究」（Ⅵ　二〇一三）を書かせていただいた。そのほか「立命館大学文学部考古学コース年報 Digging Up」の Vol. 二二（二〇一二）の中に「アラビアのロレンスと考古学と印璽学」と題して、イギリスの考古学者 A.H.Sayce（一八四五－一九三三）、A.M.F.Petrie（一八五三－一九四二）、D.G.Hogarth（一八六二－一九二七）、C.L.Wooley（一八八〇－一九六〇）、T.E.Lawrence（一八八八－一九三五）、そして留学中の濱田耕作（一八八一－一九三八）先生による『通論考古学』（一九二二）への構想について記しておいた。これらの蓄積は中国では「景教印研究―西域文化東漸考序説―」（中国・西泠印社　二〇一三）、「日本奈良法隆寺所傳烙印十字考―漢魏晋南北朝『胡印』及唐宋元『景教印研究』―」（中国・西泠印社　二〇一四）へと発展し、社長会議による論文審査で名誉社員となり、国内では第一五回松本清張研究奨励事業に「松本清張『火の路』と漢魏晋以来『胡印』および『景教印』等の研究―印章の世界にペルシア文化とその東漸をよむ―」（北九州市立松本清張記念館、二〇一五）が選定され、「松本清張『火の路』とペルシア文化の飛鳥東漸」『松本清張研究』第一六号（同館　二〇一五）に繋がっていくことになる。

この間、二〇〇一年に学位論文『日本印章史の研究』で博士号〔文学〕を取得（二〇〇四年に雄山閣より出版：図25）したのであるが、論文審査者たちによれば「日本の考古学で、印章研究で学位を取得したものはいまだひとりもいない。これからも励むように」ということであった。

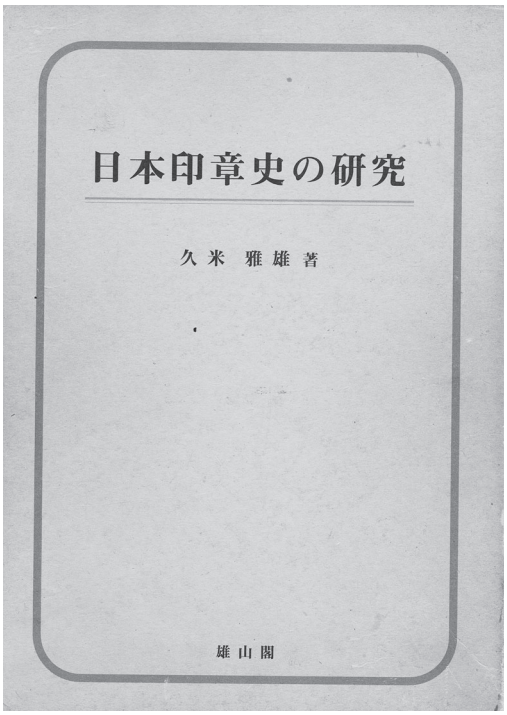

図25（2004）

二〇〇八年の大阪府教育委員会の定年退職以後、大阪芸術大学客員教授として研究を続けているが、二〇〇一年以降の論考はすべて、学位取得後の成果である。またここ数年は『はんこ』（ものと人間の文化史一七八　法政大学出版局　二〇一六：図26）や『寧楽美術館の印章―方寸にあふれる美―』（思文閣　二〇一七：図27）等を執筆・監修する機会にも恵まれ、『寧楽美術館の印章』の方は一〇〇〇部印刷したのであるが、思文閣は完売、美術館でもあと一〇部ほどを残すのみとのことである。今までとは異なり、単なる美術図書以上に、真偽の鑑別や実物印章の断代の方法論を初めて具体的に明らかにし、より

図 26（2016）

図 27（2017）

精度の高い歴史的復元に向かうための書籍として評価されているのであろう。中国の研究者も大量に持ち帰ったとのことである。

中国との国際学術研討会及び印学峰会（サミット）については二〇〇三年以来の学際があるが、中国語訳された印学に関する論文は下記のとおりである。「晋率善羌中郎将銀印及周辺歴史之研究」（二〇〇三：図28）、「日本古代印研究—官印、私印的歴史性変遷與律令国家的質変」（二〇〇八）、「漢魏晋南宋時代的日中交流史與冊封官印—『漢委奴国王』『親魏倭王』『安東将軍倭国王』印等東亜的国家秩序」（二〇一一）、「景教印研究—西域文化東漸考序説」（二〇一三）、「日本奈良法隆寺所傳烙印十字考—漢魏晋南北朝『胡印』及唐宋元『景教印』研究」（二〇一四）、「『天皇御璽』『大日本国璽考』」（嶺南印社

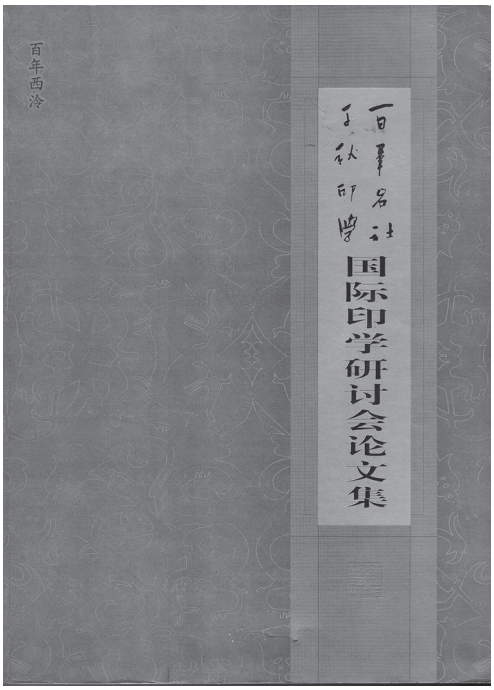

図 28（2003）

二〇一六）、「日本絲印考」（二〇一六）、「中国古印断代考—方寸之間読歴史」（中日版：二〇一七：図29）、「日本花押與戦国大名印章」（中日版：二〇一八：図30）である。日本語訳は日本人読者を配慮してか現在のところ拙稿にのみ配慮されている。本格的な印学はこれからである。篆刻も印学からの学びを反映させねばただの芥でおわり、後世の笑いものとなるのみである。究めなければならない課題は幾つもある。それはいずれも実物を観ないでは成り立たない学問領域である。

以上に記したところが、わたしの印学の書誌、世間に出てからの三六年史である。（次号に続く）

（大阪藝術大學客員教授）

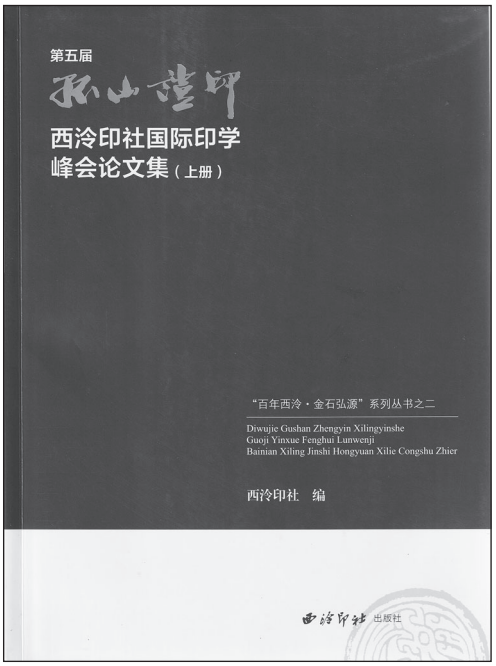

図 29（2017）

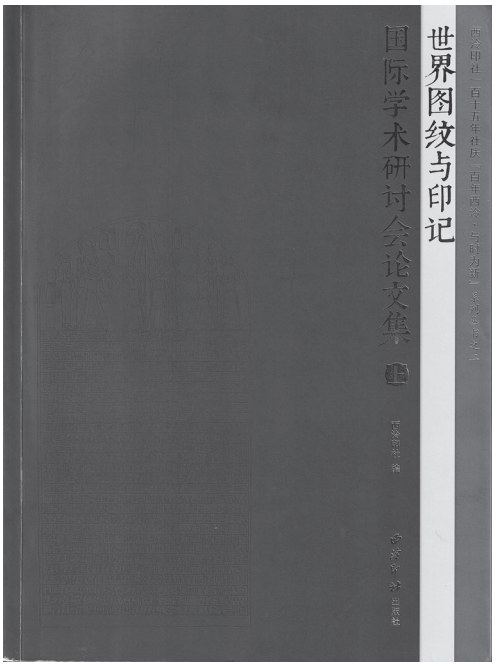

図 30（2018）